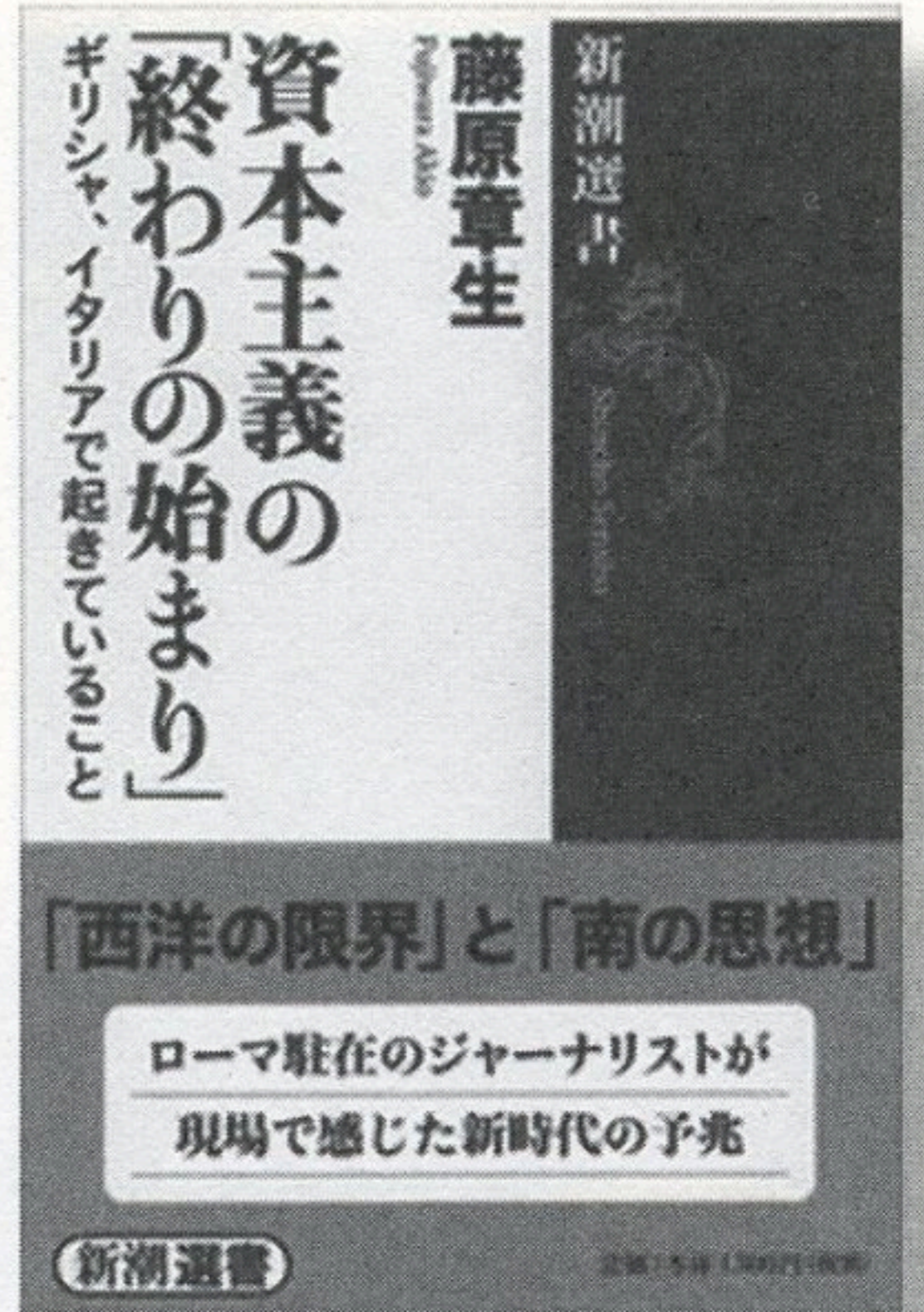


昨年一月にギリシャの映画監督テオ・アングロプロスが事故死する七か月前に、彼から「扉を開こう」という謎めいた言葉を筆者は聞かされた。この謎解きのため、筆者がギリシャとイタリアで識者たちと対話を重ねて思考した成果が本書である。ギリシャといえは債務危機だ。

危機の背景には、ギリシャ人の低い納税意識がある。税金は政治家、官僚、富裕層を肥えさせるだけだという考えが、彼らの間に根強くある。その結果、政府は国民から直接税を取れず、税率二三パーセントのギリシャ版消費税に頼らざるを得ない。国民は領収書を発行しないなどしてこれも逃れようとする。その上、ギリシャではGDP比約二九パーセントにも及ぶ地下経済が「発達」している。それゆえ、政府は借金を繰り返して消費と成長を維持してきた。

このギリシャでは若年層の失業率が五〇パーセントを超えているという。同じ地中海世界を構成するイタリアも深刻である。アングロプロスは「一歩先を行っているイタリア」という。周知のとおり、「プレカリアート」は非常勤、不安定を意味するイタリア語のプレカリオとプレタリートを組み合わせた造語である。イタリアでは一九九〇年代から短期労働契約が累増していった。いまや、大学を出ても三四歳以



藤原章生著  
資本主義の「終わりの始まり」  
新潮社、2012年  
定価 1300円（税別）

下の六割が有期の非正規雇用に甘んじている。

両国ともに政治は無為無策をさらけだし、二〇一一年一月にギリシャのパパンドレウ首相とイタリアのベルルスコーニ首相が相次いで辞任に追い込まれた。とりわけ、後者については東日本大震災と福島第一原発事故が実は大きく影響していた。同年六月のイタリアの国民投票は厳しい成立要件をくぐりぬけ成立し、ベルルスコーニに原発再開を断念させた。「社会の無意識」はベルルスコーニを見限り、辞任へのカウントダウンがはじまったのである。

ここに「扉」が開かれる兆しがある。担い手として筆者が注目するのが、イタリアのいまの四〇代である。彼らは自由に生きる、何事もがつつがっていない、悲壮感がない、前向きで明るい、のだという。しかも「特定の指導者に引張られることを嫌う」。彼らの生き方が強制

ではなく、一人ひとりの気づきによって時代の趨勢になるとき「扉」は開く。確かにそれまでには「うんざりするほど長い時間がかかる」のだが、すでにそのことを「社会の無意識」は察知しているのではないか。

なぜ筆者は彼らに期待するかといえは、彼らが次のような体臭を放たないからだ。「一つの運動を押し進め政治的主張を強く抱いた人の場合、それを理解しない人間をどこか侮るような、見下したような押しつけがましさが現れるものだ。自分が正しいことをしているという信念が、同じ考えを持たない人を排除する」(一二二頁)。

翻って日本ではどうかと思つて、You Tubeで昨年八月二二日に行われた反原発首都圏連合のメンバーと野田佳彦首相との面会映像をみてしまった。どうもいけない。

正直いって、本書のタイトルにはまたぞろ万年危機論のように陳腐な感じがしたが、ギリシヤとイタリアからそれを捉える視角は新鮮だった。「資本主義とは永遠の経済成長という非合理的な宿命を強迫のように背負わされた宗教だ」(二二四頁) というイタリア人哲学者の言葉も効いている。地中海世界は決してEUのお荷物ではなく、ここから「扉」は開くのもかもしれないと蒙を啓かれた。(西川伸一/明治大学教授)

## ギリシヤ危機が照らし出す「資本主義の危機」

藤原章生著『資本主義の「終わりの始まり」——ギリシヤ、イタリアで起きていること』